

社会や地域、友だちとの関わりの架け橋となる新聞の活用

～一学年の「総合的な学習の時間」と「国語科」での取り組み～

指定校 3年次 長野市立東部中学校 高橋 武夫

1 N I E実践にむけて

一昨年、N I Eの全国大会の授業校として「総合的な学習の時間（3年）」「社会科（2年）」の授業に取り組んできた東部中学校では、N I Eの活動を、ただ発表だけのものに終わらせたくないと考え、『日常の生活の中でのN I E』『一学年でのN I E』の2つを切り口に、その後の活動に取り組んできた。

2 実践の概要 I 『一学年の『総合的な学習の時間』でのN I E』

一学年の『総合的な学習の時間』では、以下のような学習の流れの中でN I Eを取り上げてきた。

① 1学期の活動 『新聞を活用し、ものの見方・考え方を広げよう！』

そして、新聞づくりの達人に近づこう～』

ア 実施に向けての配慮点

- ・無理なく実施
- ・「命」というテーマを忘れずに
- ・社会事象との架け橋の時間

イ 「新聞を活用し、ものの見方・考え方を広げよう」学習の展開

実施日時	主な活動	備考
6/21 月6時間目 格技室	・総合的な学習の時間 「かがやきタイム」の説明 ・新聞活用について ・取材活動をしよう ～スクラップノートの活用～ ・スクラップ開始しよう	外部講師 スクラップノート
7/ 2 金6時間目 各クラス	・スクラップをグループ分けしてみよう ・テーマを絞り込んでみよう	新聞
7/8 かがやきデイ 1～4時間目 格技室	・スクラップ新聞の作成ポイントを聞こう ・実際作成してみよう ・疑問点をお聞きしよう ・読む人に思いが届くように、工夫をしてみよう ・スクラップ新聞を完成させよう	外部講師 (1・2時間目まで) スクラップノート 模造紙
7/13 5時間目 各クラス	・クラス内でコンクールをしよう 金 銀 銅 審査委員長(担任) 特別賞	
7/16 2時間目 格技室	・学年のみんなに発信しよう	

ウ 留意点

- ・スクラップコンクールは、ペアでの制作が認められているが、原則一人一枚にする。
- ・新聞未購読家庭へ配慮する
- ・スクラップは、一人50枚ぐらいあるとよい
- ・ノートに張るときは、取り外しができるように、テープやのりで軽く留める程度にする。
- ・重く考えず、楽しんでやりましょう！

②2学期の活動

『戦争についての新聞スクラップを読み深め

平和について考え、自分たちができることを実行しよう！』

ア 実施に向けての配慮点

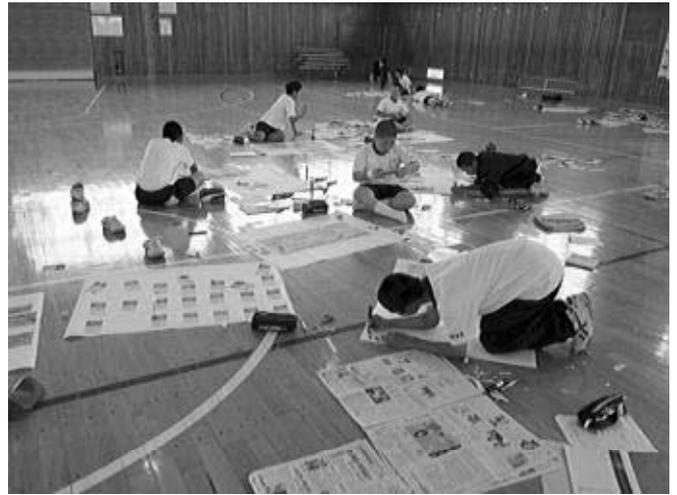
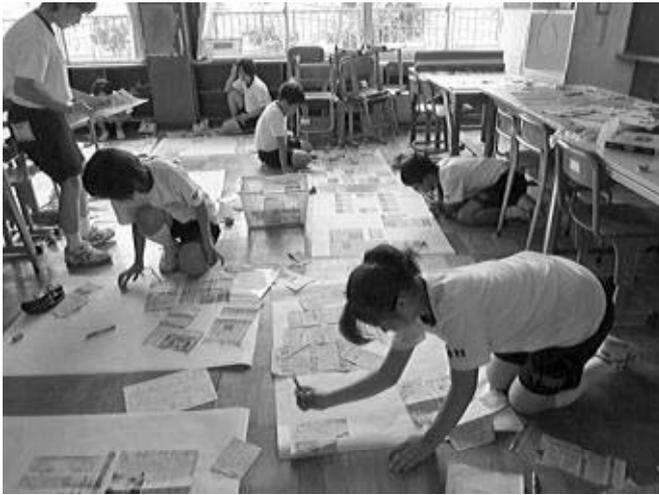
- ・「命の学習」を、平和学習を窓口に取り組み、その後様々な内容へ展開していく。
- ・戦争と平和について考える場を設定し、自らの課題をつかむことを目的とする。

イ 内容

- ・夏の課題 戦争と平和に関わる新聞スクラップを窓口で、平和について考える。
- ・講師の方のお話を聴き、大本營の見学を通して、平和のため自分ができることを考える。
- ・自分が感じたこと、考えたことを発信（新聞に投稿する）する。

ウ 「戦争と平和について考え、課題をもち、自分ができることを実行する」学習の展開

実施日時	主な活動	備考
10/4 6学半分 教室	<ul style="list-style-type: none"> ・夏の課題 戦争と平和の新聞スクラップを読み返し感想を発表する。 ・課題や疑問を書き出してみる。 ・戦時中の長野市周辺について考えてみる。 ・松代大本營とは？ 	スクラップブック 学習カード
10/5 火6 格技室	<ul style="list-style-type: none"> ・長野市に残る戦争遺跡 講演45分「松代大本營について」 	俊英高校の生徒さん 土屋教頭先生
10/12 火6 格技室	<ul style="list-style-type: none"> ・発信「平和への願いを、新聞に投稿してみよう」書き方指導 	PC スクリーン 学習カード
10/13 かがやきデイ	<ul style="list-style-type: none"> ・講演「戦争を知らないみなさんへ語り継ぎたいこと」 ・松代大本營見学 A隊1・2・3組 B隊4・5・6・7組 ・新聞への投稿原稿を書く。 	松代公民館 外部講師 吉田えいいち先生
実施日：クラスごと	<ul style="list-style-type: none"> ・投稿原稿 発表会 ・投稿の準備、発送 	グループ内で発表 会



↑「命」をテーマにしたスクラップ作品作りに取り組む生徒たち

長野市東部中学校の1年生が13日、同市松代町の松代公民館を訪れ、松代町在住の吉田栄一さん(84)から戦争体験談を聞いた。同校が総合的な学習の時間に取り組んでいる「命の学習」の一環。生徒は、身近に住む人が語る戦争の話に耳を傾けた。

1年生約260人は1学期に人権や平和、性教育など、それぞれが関心のあるテーマを選びスクラップ作品を制作。夏休みには戦争に関係する新聞記事の切り抜きを集めるなどしてきた。この日は、自分たちの住む地域と戦争とのかかわりを学ぼうと松代町を訪れた。

大本営工事の体験を語る

松代の吉田さん 長野市東部中生に



↑松代大本営跡。地下壕での作業の様子を体験する生徒たち



中学生に「二度と戦争を起さないで」と訴える吉田さん

吉田さんは1945(昭和20)年3月に徴兵され、千葉県市川市に工兵隊員として赴

任。東京大空襲後の東京で救助活動をした。同年6月からは松代大本営地下壕の工事に従事。昼夜を分かたぬ突貫工事で、寝ている間もダイナマイトで岩を砕く音が響いたという。既に地下壕は完成間近だったとし、「もう半年戦争が長引いて大本営が松代に移っていたら、原爆を落とされたのは長野市だったかもしれない」と振り返った。

吉田さんは締めくくりに「戦争の傷跡をしっかりと見つめ、二度と起らない世の中を作って」と生徒に訴えた。講演を聞いた北沢直也君(13)は「日本がかかわった戦争のことをもっと学ばなければいけないと思った」と話していた。

生徒は講演の後、近くの松代大本営地下壕も訪れた。

←2010年10月14日付 信濃毎日新聞

3 『一学年総合的な学習の時間での活動の成果』

NIEとの出会いとして、グループで新聞作りをすることでは、友だちとの関係作りに役立った。同じテーマで、紙面の校正や内容を検討するうちに、いくつもの小学校から集まった生徒同士が、自然に関わりを持つことができるようになった。

また、自らが聞き取ったり体験した戦争の様子や松代大本営の後での学習は、投稿原稿にする学習の中で、命の尊さを自分のこととして考えるきっかけになった。

4 実践の概要Ⅱ 『一学年「国語科」でのNIE』

(1) 授業 単元名 「投稿原稿を書こう」

(2) 単元設定の理由

総合的な学習の時間を中心に友だちと共同でスクラップ新聞づくりや、松代大本営を訪れた時の体験を元に、新聞への投稿をする学習に取り組む中で新聞に関心を持ち始めてきている1年生。中でも1年2組では、既に3名の生徒の投稿が信濃毎日新聞に掲載された。

そこで、身近に感じられるようになってきた新聞記事を通して、社会での出来事や身近な出来事への感想や自分の考えを原稿にまとめ、既に新聞に採用された友だちのように投稿欄に載せてもらえるような原稿を書くことで、原稿を書く力を高めると共に、感想や考えたことを書いたり発表したりすることの良さを感じる機会にしたいと考えた。

本単元では、それぞれの生徒が興味を持った新聞記事を「新聞紹介カード」にスクラップし、「だれが」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」「どうした」のかをまとめるとともに、自分の「感想」を書き、友だちに紹介し、さらに友だちに感想を書いてもらったものをファイルしていく。さらに、集まった「新聞紹介カード」の中から自分の感じたことや考えたことをもとに「投稿原稿」に書き、新聞に投稿するという学習の中で、いろいろな立場の人の気持ちや考えを加味した上で、自分の感想や経験したことから、これからの自分の行動を考え、読む人にわかりやすく伝えるために書く力を伸ばしていく学習に取り組もうと考え、本単元を設定した。

(3) 単元展開の概要

段階	学 習 活 動	指 導	評価規準 (評価方法)	備考	時間
第 一 次	1 興味を持った新聞記事をスクラップにして集める。 (1月初め)	・自宅から持って来た新聞や学校の新聞を読んで、興味を持った新聞をスクラップさせる。	①新聞の記事を幅広く読み、興味を持った記事をスクラップしようとしている。(様子)	持参した新聞 学校の新聞	1
	2 スクラップを「新聞紹介カード」にまとめ、感想や意見を書く。 (1月末)	・スクラップを「新聞紹介カード」に貼り、「誰」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」「どうした」かをまとめ、自分の感想や友だちの感想も記入する。	②スクラップした記事の要点を「新聞紹介カード」にまとめ、自分の感想や考えを記入している。 (「新聞紹介カード」)	新聞紹介カード	1
二 次	3「新聞紹介カード」の記事から1つのテーマを絞り、投稿原稿を下書きする。 (2月上旬)	・「新聞紹介カード」の枚数を増やしながらか、1つのテーマや記事に絞り、投稿原稿(500字)に感じたことや考えを下書きさせる。	③1つの内容やテーマに絞り、自分の感想や考えを、体験を元に500字程度の原稿に書こうとしている。(原稿下書き)	投稿原稿 用紙	1

	4 新聞に掲載された友だちの原稿や、相手の立場に立って行動した人の記事と読み比べることで、自分の体験と重ね、自分がすべきことを自分の考えとして書く。(本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・投稿が既に新聞に載った友だちの原稿を讀んで、友だちと相談しながら自分の原稿と比べさせる。 ・体験を元にした視点の記事を讀み、自分がこれからどうするのかを自分の考えとして書かせる。 	<p>④投稿が新聞に掲載された友だちの原稿や「タイガーマスク現象」に書かれた記事とを讀み比べ、違いや工夫を讀み取ろうとしている。 (友だちの原稿への傍線の記入)</p> <p>⑤「考え」の中には感想だけではなく、自分がこれからどうするのか書かれていることに気づく。</p>	新聞に載った友だちの投稿原稿 タイガーマスク現象の新聞記事・投稿記事 学習カード	1 (本時)
第三次	5 「考え」具体的な行動を書き入れた清書を書く。(2月末)	<ul style="list-style-type: none"> ・投稿原稿を完成させる。 	⑥自分の原稿に書かれている「考え」に、自分の具体的な行動を書く。	清書用紙	1

(4) 本時案

①**主眼** 「新聞紹介カード」の中から1つのテーマや記事を選んで自分の感想や考えを500字程度の投稿原稿に書き初めている生徒たちが、友だちの投稿記事の良さや、体験を元にした新聞記事を読むことを通して、「考え」には「人に〇〇してほしい」という内容と「自分は〇〇したい」という2種類の内容があることに気づき、自己の体験を元にししながら、これからの行動を「考え」として書くことの良さに気づく。

②指導上の留意点

- ・友だちの記事や、新聞記事を読んで気づいたことや大事だと思うことには傍線を引きながら読むように指導する。
- ・友だちと相談しながら「考え」の内容の違いについて考えさせるように指導する。

③展開

段階	学 習 内 容	予想される生徒の反応	指導 ※評価計画	時間
導入	1 新聞に掲載された友だちの原稿を讀み、書かれている内容を確かめ、自分の下書き原稿と比べる。	<p>○いいなー新聞に載ったんだ。</p> <p>・どんな内容が書かれているのかな。</p> <p>◆聞いた話の内容</p> <p>◆聞いて思ったこと</p> <p>◆体験したこと</p>	<p>・既に新聞に載ったクラスの友だち3名の投稿記事を掲示し、自分の下書きと比較するようにする。</p> <p>・4つの内容が書かれていることに気づかせる。</p> <p>※4つの項目に気がついたか。</p>	10

		◆自分は今からどうするか	
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【学習問題】 新聞に載る投稿原稿にするのには、 どんな内容を書けばいいだろう。</p> </div>	
展 開	<p>2 新聞記事の一例と新しい考 方を書いた2つ の記事を読む。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【学習課題】 新聞記事に書 かれていた人の 立場になった り、自己の体験 を通して感想や 自分の考えを書 いたりしながら 、自分の思いが 読む人に伝わる 原稿にしよう。</p> </div>	<p>○「いいことだと思う。」 ・「すごいなーと思う」 ・「ランドセルや物を贈 ることもいいけど、そ れだけではなくてふ れ合いとか何が欲しい のかも考えなくてはい けないんだ。」 ・「実際にやっているこ とから考えが書いてあ る。」 ○記事の内容の紹介 ・感想は書いてある。 ・実際に体験したことが 書けるかな。 ・自分はどのようにし ていくのかという考えも書 こう。</p>	<p>・「タイガーマスク現象」に関わる新聞を選んだ生徒に記事を紹介させる。 ・感想を聞く。 ※自分の書いている原稿に書かれた感想や考えは相手の立場に立っているか。 ・「考え」の内容にある2つの種類を友だちと相談しながら考え、自分の「考え」について考えさせる。 ・友だちの記事や自己の体験を通して書かれた記事を参考にして、自分の投稿原稿に書かれた感想や考えを見直し、書き改めたり、書き加えたりする。 ※工夫して書き直したり書き加えたりしているか。</p> <p>1 5 2 0</p>
終 末	<p>3 本時の見返しをし、次時の清書への期待を持つ。</p>	<p>・次は清書をして、友だちに見てもらおう。 ・見返しカードを記入しよう。</p>	<p>・次時は清書をし、友だちに見てもらい、いいところを見つけてもらうことを指示する。 ・見返しカードに自己評価を記入させる。 ※見返しカードに今日の学習の成果を書いているか。</p> <p>5</p>

5 『一学年「国語科」での活動の成果』

体験したことをもとに書いた投稿原稿から、新聞記事を通して知った社会や地域のできごとに関心を持ち、自分の考えを投稿原稿にまとめる学習は、新聞に興味を持ち、新聞を通して社会や地域に関心を持つことができた。また、新聞に載っていたニュースを話題に友だちとのコミュニケーションを取りながら、自分の考えを持ったり、伝えたり、友だちの考えを聞いたりする日常の生活の中での人間関係作りにも役立っている様子を見かけるようになった。

また、投稿原稿が新聞に取り上げられることはうれしいことであり、それは自身のことだけではなく、友だちのこともうれしく感じる事ができ、「また頑張って投稿原稿を書いてみよう」「また新聞を読んでみよう」という動機付けともなった。

直接、新聞記事を用いて国語の授業をしようと思うと、難しい部分はあるが、新聞記事を媒介にした取り組みは効果もあり、難しいことではないことが見えてきた。むしろ、その可能性はまだまだ広がるものと考えられる。



資料

新聞紹介カード→

↓新聞に載った友だちの投稿3点

先日、僕たちは松代大本営に行き、命の勉強をしました。そこで戦争を実際に体験した吉田栄一さんという方のお話を聞きました。松代大本営に工兵としてかかわったほか、東京大空襲にも遭ったという吉田さんは、僕たちに戦争の悲惨さを教えてくれました。

吉田さんの話を聞いて、僕はある病院で見た言葉を思い出しました。それは「戦争を始めた国の偉い人たちは、戦争には行かない」という言葉です。そして僕の心の中に、怒りの気持ちがわいてきました。

松代大本営では、中に入って

戦争の悲惨さに怒りと悲しみ

学習しました。工事の間にはこの中で、朝鮮人や日本人の作業員が亡くなったという話を聞き、どことなく空気の重みを感じました。最近の調査で、当時、地域の子どもが軍が使っていた車の事故で亡くなったことも分かったといい、それを聞いて悲しくなりました。

今回の学習で、戦争は繰り返してはいけないと思いました。僕はこれから、戦争を起こさないためにできることをしたいと思います。

長野市 塩手 達弥 (中学生・12)

2010年11月5日付 信濃毎日新聞

私は今まで「戦争は恐ろしい」と思っていた、心のどこかで架空の出来事のような感覚が消せずにはいました。けれど、実際に戦争を体験した方のお話を聞いて「本当に起こった悲劇だったんだ」と、あらためて感じました。

松代大本営を訪ねたとき、ダイナマイトを埋め込むために開けられた穴や、早く故郷に帰りたいという思いで書かれた文字などを見ました。朝鮮から連れてこられ、ここで働かされていた人たちのつらい思いも伝わってきました。

さらに戦争では、私たちと

戦争犠牲者の分まで命を大切に

じ年の子どもたちも働かされていたと聞いてびっくりしました。もしも私たちが、今の戦争のない日本ではなく、戦争の時代に生きていたらと思うと、とても怖くなります。

今の日本があるのは、戦争という過去が私たちに平和の大切さを教えてくれたからだと思います。だから、戦争の犠牲になった人たちの分まで私たちは精いっぱい生きなければいけないし、命を大切にしなければいけないと思います。

長野市 川田 里瀬 (中学生・12)

2010年11月7日付 信濃毎日新聞

新聞紹介カード 1年2組 番氏名

()新聞 年月日 朝・夕刊	
記事の見出し	
内容 誰が	
いつ	
どこで	
何を	
どのように	
どうした	
思ったこと	
友だちの感想	() ()

裏面に 新聞のスクラップをはる

私は学校での学習の中で、戦争と平和について勉強するため、松代にいる戦争を体験した方のお話を聞きました。その中で私は、戦争は多くの人が犠牲になる、とても恐ろしいものだと思えました。

私たちに話を聞かせてくれたその方は、亡くなった人を何人も見てきたそうです。また私たちは、松代大本営の象山地下壕のつくり方を聞いて、とても大変だったことが分かりました。昔は機械がなかったため、ダイナマイトを詰めて爆発させ、岩を崩してその崩れた岩を、トロッコやモッコで運んで、毎日同

じことを繰り返していたそうです。

一人一人大切にされる世の中に

戦争について深く知らない私たちは、もっと戦争について知ることが必要だと思いました。そして戦争で亡くなった人たちのためにも、二度とこのような恐ろしいことが起きないように、いろいろな人たちに伝えなくてははいけないと思いました。これからも平和が続くように、一人一人の人間が大切にされる、いじめなどが無い世の中にしていきたいです。

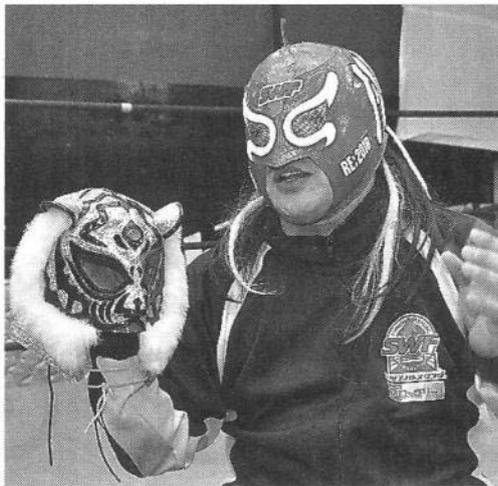
長野市 畔上 楓 (中学生・13)

2010年11月11日付 信濃毎日新聞

広がるタイガー運動 グレート☆無茶さんに聞く

子どもに会って渡して

2010年1月14日付 朝日新聞



ランドセルや文房具……、「伊達直人」からの贈り物が続いている。14日も中野市役所にお集まりした。社会人らでつくる「信州プロレスリング」の代表として、児童養護施設の子どもたちと交流しているグレート☆無茶さん(39)に、「タイガーマスク運動」への思いを聞いた。

(渡部耕平)

子どもたちに贈り物を届けたい人が増えているのは、とて「飯山学園」で、子どもたちも、僕の経験から言わせていただくと、匿名で届けるよりも、子どもに会って、手渡してあげてほしい。施設で暮らす子が一番求めているのは、人との触れ合いだからです。

愛情こそプレゼント

信州プロレスでは、昨年3月から飯山市の児童養護施設「飯山学園」で、子どもたちと「プロレス(ごっこ)」で交流しています。僕らが行くと「フー」って寄ってきますよ。子どもにレスラーをフー(抑え込み)させて遊ぶんです。抱っこや肩車をする

と喜んで、「また遊びに来てね」と言われます。本立に乗しんでくれるし、とてもやりがいがあります。僕自身、タイガーマスクを見て育ったので、子どものヒーローになりたいと思っていました。施設に行くようにになり、「この子たちのために何かをしてあげたい」と、心から思うようになったのです。初めて訪れた日、子どもたちはみんなの集まる部屋でテレビを見ていたのですが、よく見ると、たいていの子が持っているようなゲームがない。職員に聞くと「ゲームを買ったお金は、とてもありません」と言われました。「子どもが欲しいがっているのは、人気ゲームでは」と思ったのですが、それは施設に行くと初めて気付いたことです。中には、親に見捨てられた「タイガーマスク」を手にして話すグレート☆無茶さん。長野市の信州プロレスアリーナ

り、暴力を振るわれたりした子もいます。そんな子どもの境遇も、あまり知られていないのではないのでしょうか。社会が果たすべき責任は何か、僕らにできることは何かと、考えさせられました。

そこで、夏にチャリティープロレス大会を開き、寄せられたお金で、クリスマスに人気ゲーム機とゲームソフトを贈ることができました。

ただ、チャリティーで集まる金額や、僕らの活動には限界があります。県内には、児童養護施設が15カ所あるそうです(他に東京都で運営する施設が1カ所)。できるなら、そのすべての子どもたちを喜ばせたい。

先日、阿部守一知事と対談する機会があり、「県からもバックアップしていただけないか」と打診しました。阿部さんからは「具体的な案を出してみよ」と言われていました。イベントやプロレス大会のチャリティーを通じて、県や民間も巻き込むような仕掛けを考えているところです。今回のような動きは、まだ続きます。でも、プームで終わってほしくない。施設以外にも広がってほしいですね。「善意」は、みんなが持っているでしょう。モノでなくてもいい。子どもたちと一緒に遊び、愛情を注いであげる。それが何よりのプレゼントだと思います。

「タイガーマスク運動」の新聞記事と投稿記事

善意の広がりを
終わらせないで

「タイガーマスク」の善意が全国に広がっている。その中で、今まであまり知られていなかった児童養護施設に社会の目が向いたこととてもよかったと思う。

保育士である私は、1年という短い期間だが、児童養護施設に勤務したことがある。虐待を受けた大人に裏切られたりした経験を保持つ子どもたちは、なかなか心を開いてくれない。思春期の年代であればなおさらである。

そんな子どもたちと正面からぶつかっていく職員の方から、多くのことを学んだ。「ほか」

「ざい」などと言われ、心が折れそうになりながらも、子どもの気持ちをくみ取ったり、勤務時間を何時間過ぎてても子どもの話を聞いてあげたりと、自分の暮らしより子どもたちを優先していた。また、奉仕活動やボランティアとして施設を支えてくれる人たちの存在も本心からありがたかった。

子どもたちの気持ちは、お金や物だけで満たされることはない。このたびの善意の広がりは、決して一時のプームで終わってほしくない。より多くの人に児童養護施設の様子を知ってもらい、より良い方向に社会が動いていくことを願っている。

松本市 宮坂 英幸
(保育士・36)

本当にほしいのは物より心

専門里親 遠藤 聖子
(秋田県由利本荘市 50)

全国各地で児童養護施設などにランドセルや現金が匿名の「伊達直人」氏から寄贈されている。

私は白濱、親が養育困難な被虐待児や障害児を預かる専門里親だ。親子の関係が薄かったためか常に不信感・恐怖感・不安感を持

ち、激怒したり知らない人に過剰な敬意を振りまいたりしてしまつてきた。心の奥の見えない傷を抱きしめ、家庭の中で長い時間をかけていやし、子どもの心を豊かにしたいと頑張っている。

だからそんな子どもたちが一番ほしいものは、ランドセルでもお金でもなく、親の愛情(親に代わ

る人の愛情であると断言できる。それでも私は、伊達直人氏のニュースを見たら、うれしくてうれしくて涙が出て、心が震えた。寄付された方たちはそれぞれに事情がある中で施設の子どもたちに思いを寄せ、自分でできることを、と精いっぱいなさったのだ。これを初めの一歩として、一過性でなく、子どもたちのことを胸に留めて下さるよう祈っている。